

中國出土資料學會  
平成26年度第2回例会

日 時：平成26年12月6日（土）  
平成26年度第2回例会  
受付開始 12：30～  
研究報告 13：00～17：00

場 所： 大正大学 1号館2階 大会議室 （東京都豊島区西巣鴨3-20-1）  
キャンパスマップ：[http://www.tais.ac.jp/other/campus\\_map/campus\\_map.html](http://www.tais.ac.jp/other/campus_map/campus_map.html)

会場へのアクセス： 都営地下鉄三田線西巣鴨駅下車 徒歩2分  
JR埼京線板橋駅東口下車 徒歩10分  
都電荒川線新庚申塚駅又は庚申塚駅下車 徒歩7分

報告Ⅰ 椎名 一雄（大正大学文学部非常勤講師）

発表題目：出土文字資料からみる国家と社会

発表概要：郷里社会と国家の接点である“告”を端緒とする裁判記録的文書には、郷里社会の状況と国家の関係が色濃く反映されている記述が少なくない。『嶽麓書院蔵秦簡』（参）は奏讞関連文書であり、特に案例7は郷里社会の状況を読み解く上で興味深い記述が散見する。また出土文字資料は、同時代の状況を記述した传世文献史料と少なからず相関関係を有する。例えば『漢書』恵帝紀や高后紀のみに存在する戸を対象とした賜爵は、同時代的記述『二年律令』の傾向からその目的を探ることが出来る。それは国家が如何なる社会構造の構築を企図していたかという問題とも関連する。そこで本発表では、比較的書写年代が近いと考えられる『雲夢睡虎地秦簡』『二年律令』『嶽麓書院蔵秦簡』を手掛かりに、郷里社会の状況や国家との関係の一端を探ることを目的とする。また传世文献史料との比較から、史の変遷も視野に入れた考察も行ってみたい。

報告Ⅱ 大野 裕司（福山大学人間文化学部非常勤講師）

発表題目：陰陽五行説の成り立ち試論—十干十二支・数字卦・清華簡『筮法』を用いて—

発表概要：かつて梁啓超によって「二千年来の迷信の大本營」とされた陰陽五行説であるが、それはまた同時に中国人の宇宙論の根幹を成すものであり、中国理解のためには陰陽五行説を欠くわけにはいかない。陰陽五行説の歴史的な研究、特にその成立過程に関する研究は、その後夥しい数の研究が発表されたにも拘わらず、使用できる資料自体がそもそも梁啓超の時代とさほど変わらないこともあり、あまり進展はしてこなかった。が、ここ数年でそのような状況は大きく変わった。近年の戦国秦漢時代の墓地よりの大量の文献、特に術数文献の出土である。このことに関しては既に李零氏による先駆的な指摘があるが、本格的・全面的な検討はまだなされていない。

本発表では出土術数文献の中でも特に清華簡『筮法』を用いて陰陽五行説の成り立ちについて検討を行いたい。『筮法』は二元論・四元論・八元論・十元論・十二元論を組み合わせた占いであり、二元論と五元論の組み合わせである陰陽五行説と如何なる関係にあるかを考察することで、その成り立ちを探ることが出来ると思われる。方法としては殷周時代考古遺物に見える数字卦や、張光直氏によって指摘された殷周礼制における二分化現象等との関連性から考察を行う予定。

報告Ⅲ 姜 生（四川大学文化科技協同創新研究中心教授）

発表題目：馬王堆帛畫所見の尸解信仰

発表概要：馬王堆 T 形帛畫堪謂尸解信仰的理想模型。帛畫所繪九日，可從道教文獻所傳遞的“九天開則九日俱明於東方”之說獲得證據；帛畫與整個墓葬一起表達著被漢初的“道者”重構的尸解成仙信仰。“道者”群體是漢初這種跨接神仙方術與黃老道的新信仰體系的構築者和主張者。馬王堆漢墓證明，由死到仙的生命轉換乃是漢墓的最高宗旨；墓葬作為中間環節在這種轉換過程中承擔著不可替代的功能，其物理—文化構件是架設和表達這一過程的話語符號。漢墓接受戰國以來的尸解信仰作為終極意義的實現方式，以黃老道為思想詮釋系統，兩相融合，形成新信仰體系，於是過去至為簡單的“形解銷化之術”被超越，“得道”成為“成仙”的前提，死後生命轉換邏輯在更高的層面得到完善，形成較之戰國燕齊尸解信仰更為豐富完善的思想基礎。馬王堆漢墓是漢初“因陰陽之大順、采儒墨之善”的“道者”群體之神仙信仰的表達。

☆参加費(資料代) 500円

☆非会員の来聴を歓迎します

☆例会終了の後、懇親会を行う予定です。ふるってご参加ください。



連絡先（例会委員長）

〒270-8555

千葉県松戸市新松戸3-2-1

流通経済大学教育学習支援センター

富田 美智江

Tel : 047-340-0057

Fax : 047-340-0068

E-mail : [tomita-michie@rku.ac.jp](mailto:tomita-michie@rku.ac.jp)